

出来事ファイル (No.21-8)

■しあわせの村の美術家・宮崎さん

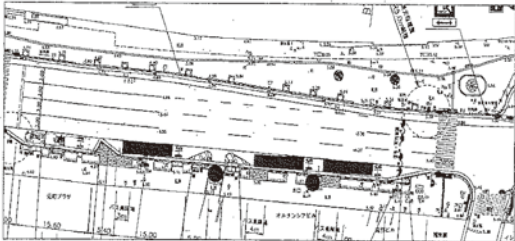
今年で10回目を迎える兵庫県内の障がいのある美術作家を紹介する「こころのアート展」が、神戸市北区のしあわせの村で開かれた。同展の初回から審査員をつとめてこられた弊協議会会員で美術家の宮崎みよしさんは会場を訪れ、常設のギャラリーに展示された木下晃希さんの作品に對面。その評価は「物事を一生懸命、そのまま見てるよ。人間として『感じる力』が一番大事。思ったまま、見たままを描いてるよ」と。



写真:神戸新聞(6月18日)より

■観光バス発着場

南京町を楽しもうとやって来たお客さん満載の観光バスは、鯉川筋の長安門前路上で一時停車、車の多い道路上を乗降車場に使ってきた。観光バスと歩道の間には他の車両が駐停車していることも多く、観光客は車の間をぬって歩道へたどり着く。こうした状況をなくするため神戸市は、JR元町駅に對面する中央幹線道路上に3台分の乗降車場を確保、実証実験を行う準備を進めている。



■サンテレビ新社屋へ

地元テレビ局として親しまれているサンテレビの本社が6月14日、ポートアイランドから住宅展示場のあった中央区相生町1丁目に移転、開業した。平成7年の阪神大震災の経験から、新本社には災害などにより電力供給がとまっても自家発電で連続72時間放送できる燃料タンクも備えている。本社移転は、昭和56年以来40年ぶり。



□読者プレゼント

開館30周年記念 夏季特別展

「美術館に行こう!ディック・ブルーナに学ぶモダン・アートの楽しみ方」

現在も世界中の子どもから大人まで幅広く愛されているオランダ出身の絵本作家でグラフィックデザイナーのディック・ブルーナ(1927~2017)。彼が手がけた人気絵本『うさこちゃん びじゅつかんへいく』を通して、モダン・アートの楽しさ、面白さまでも感じられる展覧会です。観覧ご希望の方は、ハガキに住所・氏名・年齢を明記の上、編集部まで。

先着順で5名様にペア招待券をお送りします。

会場:明石市立文化博物館
TEL 078-918-5400
期間:7月17日(土)~8月29日(日)



Illustrations Dick Bruna © copyright Mercis bv,1953-2021 www.milfy.com

神戸元町商店街 楽市楽座 情報 8月

◇こうべまちづくり会館ギャラリー(無料) TEL361-4523

8月12日(木)~8月17日(火)

時空・港神戸

8月26日(木)~8月31日(火)

透明水彩画の仲間展

◇元町映画館(有料) TEL366-2636

7月31日(土)~8月 6日(金)

『夢幻紳士 人形地獄』・『屋敷女』

7月31日(土)~8月13日(金)

『デニス・ホー ピカミンガ・ザ・ソング』

8月 7日(土)~8月13日(金)

『ねばぎば新世界』

8月14日(土)~8月20日(金)

『蟻の兵隊』

8月21日(土)~8月27日(金)

特集企画「夏休みの映画館」短編オムニバス

「きょう、映画館に行かない?」

8月21日(土)~9月10日(金)

『まっばだか』

8月28日(土)~9月10日(金)

『妖怪ハンター ヒルコ』レスタ&リマスター版

【*時短営業の為、予定は変更になる場合がございます。】



編集後記

各位の声継続を」と、お願いしたところ、対象を「みなと元町とその周辺」に広げ、執筆していただくことになった。▼折から神戸市では、神戸駅前の南北広場一帯の再整備に取り組む事業をスタートさせている。これをうけ協議会でも、まちづくりの対象地域をハーパーロードから神戸駅南側一帯の地域まで拡大した。そこには最近ホテルと放送局が開業している。▼ご執筆いただく日本建築家協会のみなさんに、弊協議会まちづくり対象地域拡大のお知らせまで。(頼りない編集部より)

建築設計を専門とされる日本建築家協会(JIA)兵庫地域会のみなさんには、1年にわたり乙仲通を中心に、いろいろな角度から通りの動きを紹介していただいた。読者から好評を得、「専門家



栄町通まちづくり委員会は、7月9日(金)10時から10時30分まで、栄町通を中心に、ゴミ拾いと不法ビラ撤去、自転車・バイクなどへの不法駐輪警告チラシ取り付け作業など、栄町通クリーン大作戦を実施した。参加者は、(株)イーエスプランニング)大澤優希、(石倉デザイン)石倉伸吾、(株式会社K Kテクノ)中村遙・白川乙葉、(神戸市景観政策課)西山昌樹、(こうべまちづくり会館)木原正剛、(佐野運輸(株))末松明・北島幸宏、(神明倉庫(株))藤尾憲弘・十時実希、(トマト銀行)吉田達也、(兵庫県信用組合)三野健太郎・藤本吉英・井上博之・小林泰彦、(広島銀行)曾我部真介、(三鈴マシナリー(株))田中梨沙、(新光明飾(株))中川俊・篠原博明・西村友博・藤田直之・大森貴美子、(佐田野不動産(株))佐田野宏之、以上23名みなさんでした。毎月第2金曜日午前10時、栄町通6丁目佐田野不動産前集合の上、実施しています。お気軽にご参加ください。



みなと元町

タウンニュース

No.
348

Town News



発行:みなと元町タウン協議会 住所:〒650-0022 神戸市中央区元町通3-13-1協和会館内 発行人:奈良山喬一 編集人:岩田照彦 電話・FAX:078-391-0831

兵庫県にニューリーダー誕生。元町に関わる新知事の「約束」とは?

合資会社ゼンクリエイト 根津 昌彦



2021年7月18日投票の兵庫県知事選挙において、斎藤元彦氏が初当選を果たした。選挙戦終盤の街頭演説合戦は、久しく神戸の都心で見た覚えの無いような熱を帯びた知事選の光景であったように思う。今回の選挙で、各立候補者が掲げた選挙公約の細やかな中身を汲んで投票した人がどれほどいたかは定かではない。しかし、新知事が「約束」として掲げた『ひょうごを前に進めよう!5つのビジョン+プラスワン』をあらためて読むと、元町商店街に直接関係しそうな約束や元町エリアとして注目すべき約束が数多く示されている。

2021年6月号のタウンニュースで私が書いた、元町エリアの強みである「物語」「日々の生活」「人情」に裏打ちされたホンモノへのこだわりの「見える化」への取り組みを進めていく上でも、新知事の約束を私たちの心に留めて、新知事との直接対話も今後折に触れて持ちながら、躍動する兵庫の実現に向けて、ともに前に進めていくことが必要であると考えている。

では、斎藤元彦新知事の「約束」を抜粋し、ご紹介しよう。

ひょうごを前に進めよう!

5つのビジョン+プラスワン(抜粋)

ビジョン3県内 GDP 成長率
全国トップクラスの実現!新時代の産業、農林水産、観光の
活性化をさらに進めます。

(1)新たな価値を創出!

駆動力をもった兵庫経済をつくります。

○起業家やフリーランスのビジネス創出を後押しするため、各地のコワーキングスペース間をオンラインで常時接続し、離れた利用者同士がいつでも情報交換できる環境を整備します。ビジネスアイデア発表会等のイベントも企画・実施します。

○起業を志す若者(小学生~20歳代)を対象とした「ひょうごスタートアップアカデミー(仮称)」を開設します。アカデミー生を対象に、起業のノウハウの提供、アイデアを披露する「スタートアップ甲子園(仮称)」、企業・投資家等とのマッチングなどに取り組みます。

○地域の経済・雇用だけでなく、文化面でも地域を支えている地場産業の支援を充実します。新商品開発、事業承継等への支援を強

化するとともに、越境EC(電子商取引)等も活用して販路の拡大を促進します。県立大学を改革し、地域活性化への役割を強化します。○商店街の活性化を支えます。チャレンジショップや日替わり店舗の拡大など、若者や女性が商店街で開業する際の支援を強化します。また、飲食店やサービス業のほか、健康増進施設や子育て支援施設など幅広い業種の出店を促進します。

(2)観光戦略を再構築!

近隣府県との観光施策の連携を広げます。

○2025年大阪・関西万博に来場する世界の人々を、県内各地の農業や地場産業などの現場に誘う「兵庫フィールドバビリオン(仮称)」を実施し、五国の魅力を世界に発信します。その実現を担う組織として、「2025兵庫フィールドバビリオン・誘客推進室(仮称)」を設置します。

○2025年大阪万博やIR開業なども見据え、近隣府県との連携を広げる「新たな観光戦略」を策定し、兵庫にもっと観光客を呼び込みます。○大阪湾・瀬戸内を舞台とした水上交通観光の需要拡大が見込まれる中、兵庫が素通りされることのないよう、神戸・兵庫津・淡路・姫路などへの誘客を促進する「令和の北前船構想(仮称)」を策定・実行する。

○早朝・夜間の観光イベントなどへの支援を強化し、地域経済への効果の大きい宿泊旅行を拡大します。

○芸術文化観光専門職大学をはじめ、学生が観光のアイデアを競う観光甲子園の開催支援等を通じ、兵庫を観光人材の創出拠点にします。

○障害者が日本一旅行しやすい県にします。おもてなしの研修、宿泊施設でのLINEチャットのフロントコール、視覚障害者用の街歩き音声ナビ、鉄道駅のバリアフリー化やホーム柵整備など、ソフト・ハード両面で取組を推進します。そのための「ひょうご福祉の観光県条例(仮称)」を制定します。

(3)関西の食の中心地!

兵庫の農林水産業の力を解き放ちます。

○大消費地に近い立地を活かし、民間スーパー等と連携して本県農水産物の売り場面積を大幅に拡大します。

ビジョン4住んでよかった満足度
全国トップクラスの実現!

みんなが誇れる郷土づくりをさらに進めます。

(1)『兵庫県、いいね!』。

誇りあるまちの魅力アップを進めます。

○魅力あふれる各地の地域資源や地域文化をさらに活かすプロジェクトチームを若者や女性を中心に県内各地域で編成し、施策につなげます。

○大阪湾ベイエリアで進む万博や大型開発プロジェクトを機に、大規模な集客や、IT、医療、金融など世界的企業・高度人材の誘致をめざす「播磨灘・大阪湾ベイエリア再生プラン(仮称)」を策定します。

○自動運転、デジタルヘルス、街の見守り、バーチャル観光など、県内各地にそれぞれの地域特性に応じた「スマートシティモデル地区」を形成することとし、その実証実験等を推進する組織を民間企業と連携して創設します。

プラスワン県民とのコミュニケーション力
情報発信力 全国トップクラス!

行財政改革を県民とともに進めます。

(1)ゼロベースで総点検!

県民目線に立った行財政改革を断行します。

○県本庁舎は、テレワークの浸透などポストコロナ社会の働き方に合ったものとなるよう、現在の再整備基本構想を見直します。また、人や企業が集まり、地域の発展につながる県庁周辺一帯の再整備計画を公民連携により立案、推進します。

(4)県民とのコミュニケーションを強化!

情報発信力を高め、直接対話を重視します。

○リアルコミュニケーションと同レベルで重要となるネットコミュニケーションを強化するため、SNSでの情報発信に特化した戦略チームを民間活力に活かして創設します。○形式的な意見交換会ではなく、知事が県内各地に出向き、県民や市町、団体、企業等と真摯に意見交換を行い、県政に反映させます。

一見、元町商店街に関係ないのでは?と映った「約束」もあったかもしれないが、ここに掲げた『17の約束』は今後の県政推進に対して、私たちが能動的に関わっていけば、必ずまちに誘客や消費の果実をもたらしてくれる施策であると私は考える。近い機会に、まずは新知事と元町が真摯に意見交換を行うことから始められたらと願う。

海という名の本屋が消えた（93）

平野義昌

諏訪山界隈(11)

久坂葉子の残りの日々をたどる。1952(昭和27)年12月29日、富士正晴は二日酔いのまま葉子を訪問。執筆中の「幾度目かの最期」原稿の束を見たが、内容は読まなかった。既に自殺の決意が書かれていたはずだ。葉子は大海日には書き上げてしまう、と言った。

〈いつもお喋りのわたしが、その作品の題を訊ねもせず、又、ちょっと見せてごらんと手にとろうともしなかったことは不思議である。余程、体も頭も参っていたのだろう。〉註1

葉子が絵付けした灰皿と黒い徳利を渡された。形見わけ、と気づけなかった。富士のもう一つの悔みだ。〈疲れたわたしは横になったまま喋っていた。この世の中は厭だ、少しもいい事がない、女房とか子供とかをもって、やっと生きなければならぬ理由を作ってるみたいなものだという風なことをわたしは言っていた。横横りに坐っていた彼女はわたしの顔を柔かく見下ろしながら、同意していた。〉註1

この日初めて富士は、いつもお茶を出してくれる上品な女性が葉子の母と知る。

富士が腰を上げる。葉子も兄と約束がある、と一緒に家を出る。富士は帰りたいが、葉子が引き留める。喫茶店に入り、富士は「VIKING」同人・坂本眞三を呼び出した。男二人小用に行く、と、彼ら待つ姿が遠くから見えた。坂本はその時の葉子の姿を思い出す。

〈……彼女はいつでも孤独な鳥が寒さに翼をちぢこめているような恰好で僕たちを待つともなく待っていた。それははじめでありあわれな姿だった。〉註1

葉子は富士を執拗に引き留める。阪急(当時正式社名は「京阪神急行電鉄」、略称「阪急」)三宮駅の改札口でまだ留める。富士は電車に乗ったものの、後ろ髪を引かれる思いだった。〈……久坂の心がわたしを必死にひきもどそうとしているような肉体の感覚が現にあるのをわたしは否定出来なかった。〉註1

坂本が元町1丁目までタクシーで葉子を送った。彼女は「幾度目かの最期」を書くのだ、と言った。

30日、葉子は恋人「鉄路のほとり」からの連絡を待つが、待ちぼうけ。31日午前2時、「幾度目かの最期」脱稿。

作家・柏木薫(1930年生、「久坂葉子研究会」主宰)が最後の一日を関係者の証言に推測を加え、再現している。註2

31日早朝、葉子は京都市上京区に住む「鉄路のほとり」を訪ねる。彼は、身分違い、と冷たく突き放す。葉子は「幾度目かの最期」原稿を手渡す。

[推測]葉子は曾祖父ゆかりの嵯峨野天龍寺に向かい、家の興亡、信仰を振り返った。

葉子は神戸に戻り、14時新開地の神港新聞社主筆に面会。原稿の約束をして稿料前借り。論説委員とタクシーで三宮神社西門まで行き、近くの飲み屋に入る。散会後、三宮センター街で音楽評論家に遭遇し喫茶店。18時頃レコード店で女友だちと待ち合わせ、トアロード西のビアホールで忘年会。友人の画家、作曲家、演劇人が同席。葉子の結婚契約相手「青白き大佐」は実業家ゆえ年末忙しく、作曲家に見守りを依頼していた。それがこの忘年会だ。別の女友だちにも葉子のことを頼んだが、「自殺しようとする者はどうしても止められない」と断られた(註1)。阪急三宮駅西口近くの店に移動。葉子はピアノを弾き続けた。シャンソン「人の気も知らないで」。補註

〈人の気も知らないで／涙も見せず／笑って別れられぬ／心の人だった／涙かれん／もだえる／この苦しかった思い／人の気も知らないで／つれないあの人〉註3

葉子はバッグの香水瓶などを他の客に向かって投げ、進呈する。その後、仲間たちの目を盗み、財布だけ持って店を抜け出す。[推測]葉子は六甲駅までタクシーで移動。駅周辺を歩き、島尾敏雄の旧宅を眺め、信頼する「熊野の小母さん」宅の前に立った。

当夜「熊野」は葉子に対面していないが、気配を感じた。家まで来たと確信している。六甲駅のホームで顔見知りの大学生が葉子に会い、その足で「熊野」に報告した。彼は「熊野」になぜ連れて来なかったのか、と詰問され、早く帰れと怒られた、と弁解。〈死の直前、上りプラットホームで知人に出会った久坂はさぞ困惑したに違いない。今度こそ絶対に失敗はしたくない、と固く心に誓っていたからだ。〉註2

21時45分、葉子は阪急六甲駅ホームから梅田行特急電車に飛び込む。

周囲の多くの人間が葉子の行動を警戒していた。それでも止めることはできなかった。

画家と作曲家はしばらく店で待った後、葉子の荷物を持って川崎邸に行く。既に警察から電車事故の知らせが届いていた。除夜の鐘が鳴るなか、母・兄・画家が六甲駅に向かう。検死は終わり、遺体は棺に納められていた。棺を持つ兄と画家の手が血に染まった。

布引の川崎家菩提寺・徳光院に遺体を運んだ画家は中西勝(まさる、1924～2015年)。〈(葉子は)マフラーをしとったんですよ。寒い日でね、そのマフラーで首吊って死のうかなんて言ったんです。(中略)ぼくが「あんたね、死なんとね、いろんなものがあったり、遊びがあったりおもしろいことがあったり、ここに食いもんがあると、だからそんなんをすべて体験してから死ね」と言ったような気がする。〉註4

この日富士は何をしていたのか。大海日は「厄日以外の何ものでもなかった」。正月用の料理のために、庭で飼っているあひるを絞め殺す役目があったからだ。

〈……鳥獣虫魚、草木花に心をわかつことができる、作家というよりむしろ詩人である彼の憂鬱は、家族からあひる締めめの代償として与えられる焼酎一本を飲んでも、拭えるものではなかった。〉註5

53(昭和28)年1月1日、富士は「青白き大佐」から悲劇の電報を受け取った。ちょうど開高健夫妻が年始訪問中だった。富士が川崎邸を訪れると、父親が菩提寺の場所を教えてくれた。お堂には既に人が集まっていた。母親が「拝んでやってください」と挨拶するが、富士は拒んだ。母親がお酒を勧め、「御厄介をかけまして」と礼を言う。兄が「澄子！」と絶叫しながら棺にすがりついた。「鉄路のほとり」は母親の手を取り泣いていた。演劇仲間の青年たちが猿股姿で踊り歌いはじめた。

〈……苦い酒をのみながらわたしはそれを見ていた。いっそこのようなのが不吉な死に方にふさわしいのかも知れない。棺の布の血を眺め、踊る青年達を眺め、わたしは体の遠いところから悲しみが浸み出してくるような気がした。しかし、その悲しみは水のように冷たく何か憤りめいたものことからみ合っていた(後略)。〉註3

青年たちが、葉子を殺したのはおれだ、いやおれだ、と泣き叫んだ。富士は、葉子を救おうとしなかった自分を冷酷、と思う。

〈……久坂の本をせめてのことに出してやりたい

という憐れみの情しかない。〉註3

富士はコートをかぶって泣いた。「幾度目かの最期」原稿は「青白き大佐」が「鉄路のほとり」からを取り上げ、富士に渡した。この日、富士は明石で宿泊、翌日の葬儀時間に遅れた。葉子の本出版を「具体的かつ熱情的に考えて」(註5)実行する。

「幾度目かの最期」は「熊野の小母様」に宛てた遺書の体裁。恋愛関係にあった3人の男性「緑の島」「青白き大佐」「鉄路のほとり」のことを告白する。恋しい「鉄路のほとり」からの連絡がなく別れの手紙を速達で出したことも書いた。それが30日のこと。「又生きる元気を失ってしまったのです」。註6

文中で富士に、原稿二つ発表しないでほしい、と告げている。同様の手紙も出していた。一篇はエッセイ「久坂葉子の誕生と死亡」。もう一つは祖母の死と戦後の一家を書いた掌篇小説「淀んだ血㊦」と思われる。

富士は、「発表しないでほしい」を「久坂葉子死亡」の取り消し、と解釈したいのだが、〈(「幾度目か～」には)久坂式の仕掛けがしてあって、完全に久坂葉子を殺す時限爆弾となっている。非常に短時間で爆発するようになっている。けれど、それが爆発するためには彼女自身のおそるべき律儀さが必要であった。その律儀さを彼女は持っていた。そのことをわたしは哀れとも見、又、雄々しいとも見る。〉註7

自殺するということは残された者に多くの荷を背負わせる。

事件報道は1月1日の紙面には間に合わなかっただろう。2日は休刊日。3日「神戸新聞」に記事はなく、父親名で「31日澄子急逝、2日葬送相営みました」の知らせのみ。創業家への配慮だろうが、私は報道機関の使命に疑問を持つ。同日「朝日新聞」は〈「つぼみ」で散る文学 若い女流作家ナゾの自殺〉と題し実名で報道、死を惜しんだ。写真

註1 富士正晴「エリザベス版久坂葉子伝」『暦・久坂葉子伝』(六興出版、1981年)所収

註2 柏木薫『その日の久坂葉子』 編集工房ノア 2011年

註3 富士『暦・久坂葉子伝』

註4 「座談会 久坂葉子没後五十年に語る 中西勝夫妻・久家義之・久坂葉子研究会」『久坂葉子研究4』(同研究会、2008年)所収

註5 島京子『竹林童子失せにけり』 編集工房ノア 1992年

註6 久坂葉子「幾度目かの最期」『久坂葉子作品集 女』(六興出版、1978年)所収

註7 富士正晴「あとがき」上掲『作品集』所収
補註 モーリス・オブレ、ギイ・ゾカ作詞作曲、ダミア歌唱、フランス映画「ソーラ」挿入歌(1931年)。訳は奥山鑊。富士作品では若干歌詞が違う。



写真:「神戸新聞」「朝日新聞」1953年1月3日

みなとMIO MACH ケンチクさんぽ

公益社団法人 日本建築家協会 近畿支部

兵庫地域会 地域まちづくり委員会

vol.1

みなと元町の「シンボル」をめぐる

前回まで1年間にわたり、私たち日本建築家協会(JIA)兵庫地域会のメンバーで、「乙仲通境界デザインワークショップ・乙仲さんぽ」の活動紹介とコラムを連載させていただきました。今回からは、対象エリアを「みなと元町とその周辺」に広げて、建築設計を専門とする私たちの視点で、この地域の空間的な魅力や可能性について、記事を連載させていただくことになりました。引き続きどうぞよろしくお願いします。

第1回は、みなと元町の「シンボル」をめぐる、日頃考えていることを、私見ではありますが、書かせていただきたいと思います。

シンボルは街を象徴し、その魅力を高めてくれる大きな存在です。さて、みなと元町のシンボルというと、どのようなものでしょうか？

このエリア内でも通りごと、町丁ごとに異なる特徴がありますので、それぞれの大切なシンボルがあるかと思いますが、地域住民でない私にもすぐ思い浮かぶシンボルとしては、街から間近に見える「ポートタワー」や元町通商店街の「スズラン灯」があります。

また私は近年知ったことですが、戦後まも



シンボルのデザイン活用について

シンボルはそれ自体の存在が街の魅力を高めるのはもちろんのこと、それをモチーフとして様々なデザインに活用することで、さらに街の魅力アップにつなげられると思います。

ポートタワーについて考えると、モチーフにしたイラストやグッズをとところどころで見かけますが、プロポーションをかなり歪めて描かれていたり、極端に省略されたりしていて、せっかくの造形美をうまく表現していないものが多いことが、私は以前から気になっていました。

それはポートタワーの鼓型の構成や接合部分が、一見複雑に見えることから、形を正確に捉えるのが、なかなか難しいからだと思います。

しかし設計者が考えた造形原理や基本寸法をきちんと学ぶと、あの美しい曲線が、とてもシンプルで直線からできていて、再現も難しくないことがわかります。私自身、その優れた造形原理

なく、元町通3丁目商店街が「ジュラ街」と呼ばれる斬新な建築デザインで、いち早く復興を遂げたことから、「ジュラルミン」もかつてこの街のシンボルであったと思います。今ではもう、痕跡も残っていないようですが。

歴史的にはもう一つ、ちょうど1964年の神戸ポートタワーの竣工直前に入れ替わるように姿を消した川崎造船所の巨大な「ガントリークレーン」は、それまで街のどこからでも見え、港の産業を支えた、かつての街のシンボルであったことも知りました。

ここで私があげたシンボルたちは、大きさは様々ですが、ある共通点があることに気づきました。それはいずれも金属でできていること、そして作られた時代の最先端を行く優れた造形性があることです。

時代が古い順から改めて見てみると「ガントリークレーン」が建造されたのは、大正元年(1912)。実用目的の港湾設備で、現在はキリン型ですが、当時の写真を見ると、巨大な鉄骨フレームは、やはり時代の先端を感じさせる造形性を誇っていたと思われます。

次に元町通に「スズラン灯」が最初に設置



されたのは、大正15年(1926)。スズランの花の部分はガラスグローブですが、ブラケット部分は、エレガントな曲線を持つアール・デコスタイルでデザインされました。戦時中の供出を経て、その後、丁目ごとに特徴のある金属造形として復活。現在に受け継がれています。

そして戦後の「ジュラ街」の建築群。突き出し看板部分にジュラルミンが使われていたようで、当時の写真からは簡明なモダニズムの構成美とジュラルミンならではの特別な光沢感、そして新時代を開く復興のシンボルとしての明るさが感じられます。

1964年に竣工した「神戸ポートタワー」は、優れた発想と高度な技術で、一葉双曲線と呼ばれる鼓型の造形美を実現。「鉄塔の美女」として広く知られ、人々に愛されてきました。そして現在も、ポートタワーは、海洋博物館のスペースフレームやモザイクの観覧車と合わせて、神戸のシンボルとして、輝き続けています。

このように、各時代の高度な技術と美意識が追求された「金属の造形美」。それがみなと元町を象徴するシンボルとして、それを輝かせる光と相まって、街を彩り、そこに神戸・みなと元町ならではの先進性とエレガンスのスピリットが宿ってきたのではないのでしょうか。



様々なものが考えられ、雑貨や家具、パッケージなどにデザインを活用できるかと思います。

ちょうど、神戸ポートタワーは2023年に60周年を迎えるにあたり、今秋から2年間の休館を経て、リニューアルオープンするとのこと。

そこで今、神戸松蔭の学生たちとこのようにポートタワーをモチーフに、様々なデザインを考え、活用する提案プロジェクトに取り組み始めています。ポートタワー型の大小の照明や様々なグッズのデザインが、小さなシンボルとして街を彩り、リニューアルの期待感を高め、街を活気づけることをイメージしながら、取り組んでいますので、ご賛同いただければ幸いです。

